

## 訳者解説

本書は、Andrew Abbott, *Department and Discipline: Chicago Sociology at One Hundred*, University of Chicago Press, 1999 の全訳である。原タイトルを直訳すると『学科と学問分野——シカゴ社会学の百年』となるが、学科とは具体的にはシカゴ大学社会学科、学問分野は社会学を指しているのので、翻訳のタイトルは『社会学科と社会学』とし、副題は、あえて「シカゴ社会学百年の真相」とした。その理由はあとで述べることとして、まずは、原著者であるアボット教授がどのような研究をしてきたのかを紹介することから、この解説を始めたい。

## アンドリュー・アボットの紹介

著者のアンドリュー・アボットは、現在、シカゴ大学社会学科およびカレッジのグスタフ・F・&・アン・M・スウィフト功労教授である。1970年にハーバード大学で歴史学と文学の学士を取得後、1982年にシカゴ大学で社会学の博士学位を取得、ラトガース大学で13年間教鞭をとったのち、1991年にシカゴ大学に着任して現在にいたっている。1991年から1994年まで『仕事と職業』(*Work and Occupation*)を編集、2000年からは『アメリカ社会学雑誌』(*American Journal of Sociology*)の編集を担当している。また、2002年から2003年にかけて社会科学史学会(Social Science History Association)の会長を務め、オックスフォード大学ナッフイールド・カレッジでノーマン・チェスター研究員の経験もある。

アボットの研究の出発点となったのは、職業の生態学的理論を展開した『専門職のシステム』(*The System of Profession*, University of Chicago Press, 1988)である。この分野の研究のほとんどは、一度にひとつの職業を研究しているが、アボットは専門職のシステムを全体として考察し、仕事の統制権をめぐる専門職間の競争が、専門職の発展の原動力になっているとする新しい理論的アプローチを提出した。たとえば、19世紀後半以降の米国と英国の法律専門職を比較して、どちらの場合にも、競争相手が法律専門職の発展に影響しているが、米国の法律家にとっての主要な競争相手は法人、英国の法律家の主要な競争相手は国家であったとする。

さらにアボットは、専門職における職業キャリアの研究にもとづいて、主流の社会科学の方法を批判する理論的論文にも果敢に取り組んでいる。かれは、とくに、文脈、時間性、出来事を重視し、「社会的シーケンス分析」を、地位達成研究に代表される変数パラダイムに代わるものとして提案する。アボットによれば、シーケンス分析は、イベント・ヒストリー分析のような特定の技法ではなく、社会生活についての問いの集まりであり、それらの問いに答えるのに利用可能な技法の集まりである。『時間が問題である』(*Time Matters*, University of Chicago Press, 2001)という著書のなかで、アボットは、われわれが社会分析の方法を採用するときにはいつでも、原因と出来事、行為者と相互作用、そして時間と意味について、特定の諸仮定をおいていることを明らかにする。アボットは、従来の仮定をくつがえし、シーケンスをキーワードとして、新しい社会理論の基礎を据えようとする。これが、本書で言及される文脈主義パラダイムの一次元を構成することになる。

本書は、アボットの専門職研究と社会理論研究の応用問題として位置づけることができる。のちに概説するように、本書は、シカゴ社会学と学術雑誌 *AJS* の分析を中心としている。*AJS* は、現在でも重要な出版メディアであるが、それが生み出したはずの専門職（社会学という学問分野）の世界に組み込まれ、いまや社会学研究を科学的にするために侵入してきた退屈な変数パラダイムに脅かされるにいたった。それに対して、シカゴの伝統は、社会的事実を、時間的・空間的文脈のなかに状況づけられたものとして経験的に研究することである。この視点が、遡及的に、社会学科と *AJS* の歴史そのものに適用されることによって、本書は、社会過程は、固定された実体ではなく、相互に連結した出来事のシーケンスであるという理論的主張を含むものとなっている。

アボットの近年の研究には、社会構造と文化構造におけるフラクタル・パターンの理論的分析（『学問分野のカオス』 *Chaos of Disciplines*, Chicago, 2001）と、社会科学における発見法への短い案内（『発見の方法』 *Methods of Discovery*, Norton, 2004）がある。専門職、社会理論、学問分野としての社会学という自身の先行研究をもとに、アボットは現在、『社会過程』（*Social Process*）と題する社会理論の一般研究をしており、知識の将来についての本も準備中である。その他、近年の研究としては、社会科学における帰結の概念、「詩的な社会学」の概念、そして社会的実体における連続性の問題に関心を寄せている。シカゴ大学計算研究所の上級研究員として、アボットは図書館での検索に関する計算理論についても書いている。

研究と論文執筆のほかに、アボットはシカゴ大学で積極的に社会学の大学院学生を指導している。かれは、70 以上の博士論文審査委員会にかかわり、かれの指導学生は現在、米国内外の多くの社会学科で教授職を得ている。

〔任雪飛・松本康〕

## 本書の解説

著者の研究経歴と本書の位置づけは、以上のとおりである。ここで、本書の概要について、みていくことにしよう。本書は、序文、プロローグ、7つの章、エピローグから構成されている。序文では、本書の成立経緯が示されている。もともとのきっかけは、1992年当時『アメリカ社会学雑誌』（以下 *AJS*）の編集者であり、シカゴ大学社会学科の同僚でもあるマルタ・ティエンダから、1995年の *AJS* 百周年にむけて、*AJS* の歴史について論文を書いてほしいという依頼を受けたことにある。アボットは、忙しいから勘弁してほしいと断るが、結局、断り切れずに引き受けてしまう。ところが、じっさいに資料探しを始めてみると、社会学科との関係や社会学という学問分野の制度化との関係で、*AJS* を捉える必要を痛感し、また掘り出してきた資料が、従来のシカゴ学派についての伝説とはかなり違うものであることに気づいて、この研究にはまりこんでしまう。

*AJS* は、本書でも示されているとおり、1895年にシカゴ大学出版会から出版されるようになった社会学の専門雑誌であり、こんにちでも、アメリカ社会学会機関誌『アメリカ社会学評論』（*ASR*）と並ぶ権威ある雑誌である。その編集は、伝統的にシカゴ大学社会学科によって担われてきた。アボットの見方は、当初、社会学科の初代学科長であったアルビオン・スモールが個人的に編集する雑誌であったものが（第3章「アルビオン・スモ

ールの *AJS*)、1920 年代に、スモール引退とともに、シカゴ学派の雑誌となり (第 4 章「シカゴ学派の *AJS*)、1950 年代ごろからは、シカゴ社会学の性格の変化と、社会学という学問分野の急速な発展と制度化によって、*AJS* の位置づけが変化し (第 5 章「移行期の *AJS*)、しだいに、学問分野に責任をもつもっと一般的な学術雑誌へと変貌していった、というものである (第 6 章「*AJS* の現代的形態」)。

序文によれば、「この歴史の前半」(おそらく第 3 章と第 4 章) の原稿を *AJS* 編集部を持ち込んだところ、掲載を拒否され、結局、一冊の本として出版することになったという。こうした経緯から、この本はもともと *AJS* についての本であり、*AJS* を動かしていたふたつの力、社会学科と社会学の動向が、実質的な主題になっている。

**シカゴ学派** ここで、シカゴ社会学とは何かという厄介な問題に立ち入らなければならない。この厄介さについては、第 1 章のシカゴ学派に関する歴史研究で扱われているが、ある程度の背景的知識を必要とするので、若干補足しておこう。

第 1 章の最初の節で簡単に触れられているように、通常、「シカゴ学派 (社会学)」と呼ばれているものは、おおむね 1920 年代から 1930 年代にかけて、シカゴ大学社会学科で花開いた一連の研究実践を指している。この時期区分の根拠をなしているのは、ロバート・パークの在任期間であり、パークは、W・I・トマスとの出会いをきっかけに 1913 年からシカゴで活動を始め (Bulmer, 1984, p.37. 正式の着任は本書によれば 1914 年)、やがて着任するバージェスとともに、強力な指導体制を確立する。1920 年までに、社会学科は、スモール、パーク、バージェス、フェアリスの 4 名の教授による指導体制に移行し、1921 年には、パークとバージェスが編集した教科書『科学としての社会学入門』が出版される。このパークとバージェスの指導のもとに、おもにシカゴをフィールドとする数多くの経験的な調査研究が大学院生たちによって実施され、シカゴ社会学シリーズとして、シカゴ大学出版会から続々と出版されていくのである。本書ではあまり触れられていないが、1923 年には、ローラ・スペルマン・ロックフェラー記念財団から研究資金を獲得して、学内に学際的な研究組織「地域コミュニティ調査委員会」が結成され (Bulmer 1989, p.138)、研究のインフラストラクチャーも整備された。この勢いが失われていくのが 1930 年代で、地域コミュニティ調査委員会の研究資金は 1931 年にはなくなり、1934 年にはパークが退職する。第 4 章で主題となっている *ASR* 論争もこの頃に始まっており、シカゴ社会学が衰退期に入っていきいくのである。

シカゴ学派とはなんであったのかについては、通常、ふたつの理解の仕方があるように思われる。ひとつは、「都市社会学のシカゴ学派」という理解である。それは、19 世紀後半のシカゴの急成長を背景に、近代大都市の純粋型ともいえるシカゴに出現したさまざまな都市問題を対象として、人間生態学・社会組織論・社会心理学の視点から経験的に接近した研究実践であった。パークの「都市」(1925 年)、同心円地帯理論で有名なバージェスの「都市の成長」(1925 年) は、そうした研究への導きの糸であり、アンダーソンの『ホーボー』(1923 年)、マウラーの『家族解体』(1927 年)、ワースの『ゲットー』(1928 年)、スラッシャーの『ギャング』(1929 年)、ゾーボアの『ゴールド・コーストとスラム』(1929 年) などは、その成果である。ワースの有名な論文「生活様式としてのアーバニズム」(1938 年) は、シカゴ学派都市社会学の理論的到達点を整理したものと受けとめられている。もうひとつは、理論的視点としてのシカゴ学派、すなわち、ワースとほぼ同世代のブルーマ

一によって「シンボリック相互作用論」と名付けられたアプローチである。ここでは、むしろ、シカゴ学派哲学として知られているプラグマティズムの系譜が強調され、G・H・ミードからブルーマーを経由した流れに光が当てられる。

このふたつの理解は、分裂しており、きわめて対照的である。都市社会学的理解では、シカゴ学派は、乗り越えられるべき正統派であり、フィールドワークには強いが理論的には弱いとみなされてきた。これにたいして、シンボリック相互作用論の理解では、シカゴ学派は、その後、一世を風靡する構造機能主義に対抗する、社会学の反主流派であった。この機能主義との対抗関係については、本書第2章で集中的に分析されている1950年代のシカゴ大学社会学科内での論争にすでに看取されるが、1960年代後半以降、機能主義批判が強まるにつれて、強調されていったように思われる。

いずれにしても、1920年代のシカゴ社会学最盛期には、当事者たちはだれも自分たちを「シカゴ学派」とは考えていなかった。シカゴ社会学は、アメリカをリードする最先端の社会学そのものであった。「シカゴ学派」というラベルはあとから振り返ってつくられたものなのである。

本書第1章（シカゴ学派に関する歴史研究）に戻ると、「シカゴ学派」の研究は案外新しく、ロバート・フェアリスの『シカゴ社会学』（1967年）とカステルの都市社会学批判（「都市社会学は存在するか」[1968年]）を別とすれば、ほとんど1970年代後半からであり、1980年代には、シカゴ学派について多くの本が出版されることになった。アボットは、シカゴ学派の「自然史」という概念を応用して、この学派研究の流れを整理している。まず最初にだれかが、研究対象としてのシカゴ学派を定義する。つぎに、研究対象についての定義を前提として、さまざまな解釈が研究成果として産出される。パークのカリスマ性や地域コミュニティ調査委員会のような制度が、ここではクローズアップされる。第3段階では、むしろ、研究対象の特殊性が薄められ、より長い系譜の一コマとして、歴史的文脈のなかに再び埋め込まれる。シカゴ学派に先行する、社会改革運動や社会調査運動、人類学的フィールドワーク、ジャーナリズム、そして批判的社会理論などがそうした文脈を構成する。しかし、それらやその他のさまざまな系譜が一カ所に集中して相互に反応し始めたとき、そこに何か独自のものが生まれ、それぞれの系譜を変容させる効果をもつ、とアボットは論じる。社会現象としてのシカゴ学派は、明らかに1920年代にそのような「共振」をひきおこし、こんにち、われわれがシカゴ学派の研究成果としてリストアップするような現実的な効果をもたらした。しかし、アボットは、なぜかこの1920年代の過程には、踏み込んだ分析をしていない。むしろ、アボットが踏み込んでいるのは、1950年代の自己評価研究における学科内論争である。ここで初めて、当事者たちに「シカゴ学派とは何か」が意識され、その答えは一致しなかったものの、この論争の過程で何かある独特の文化的実体として「シカゴ学派」が創造されたと思われるのである。

**「シカゴ学派」の構築** 第2章は、本書の最初の山場である。1950年代初頭の社会学科は、バージェスとオグバーンが定年直前であり、次の世代のワース、ブルーマー、ヒューズ、ウォーナーに加え、さらに下の世代であるハウザーが着任していた。オグバーンとウォーナー以外は、シカゴ出身者であり、ワース、ブルーマー、ヒューズは、パークに教えを受けた世代である。このころの社会学科をめぐる学内環境は、1920年代とは一変しており、全国世論調査会社（NORC）、人間発達委員会（HD）、人種関係委員会、労使関係センタ

一、家族研究センターなどの研究所があって、教授陣は院生たちとともに、こうした研究拠点で研究していた。これは、学科政治を複雑にする要因ではあったものの、それだけであれば、それほど重要ではなかった。

この時期の学科政治を混乱させた最大の要因は、ハッチンズ総長と後継のキンプトン総長を中心とする大学経営陣の態度であった。とくに、ハッチンズは、カレッジ、今風にいえば、一般教育を重視し、専門分野の教育を冷遇した。しかし、社会学科にとってそれ以上に重要だったのは、シカゴ社会学がもはや社会学の最先端ではなくなってきたのではないかという経営陣の疑念であった。時あたかも、ハーバード大学では、タルコット・パーソンズが、構造機能主義の理論を展開して破竹の勢いであった（『社会体系論』の出版は1951年）。コロンビア大学では、ラザースフェルドとマートンが、計量研究にもとづく仮説検証型の経験社会学を推進していた。社会学は明らかに転換期を迎えていたのである。

この転換期に、シカゴ大学社会学科はどう対応するか。この問題は、学科内に意見の食い違いをもたらし、後任人事、とくに学科長人事に混乱をひきおこした。バージェスとオグバーンの退職に備えて、次期学科長を選ばなければならない。当然、ワース、ブルーマー、そしてヒューズの世代から、学科長が選出されるはずである。アボットの見立てでは、この時点でブルーマーとヒューズは仲が悪かった。ワースが候補として選ばれ、経営陣に却下された。1950年の末のことである。「1952年の冬までに」残りのふたりについての提案も却下された。アボットは、そのふたりをブルーマーとハウザーであると推測している。結局、トップダウンで、ヒューズが学科長に任命された（1952年11月学報）。この間に、ワースは急死し（1952年5月）、ブルーマーはバークレイに移っていった（1952年7月）。その結果、ヒューズの学科長時代に、社会学科はまっぴたつに分裂した。ヒューズ＝リースマン派とハウザー派である。1956年の学科長人事は、またもや経営陣も巻き込んだ大混乱となった。結局、キンプトン総長は、ハウザーを学科長に指名した。しかし、ヒューズの学科長時代もハウザーの学科長時代の初期も、共通して獲得している人材はコロンビア出身の若手（ブラウ、カツ、ロッシ）であり、失っているのは、対立する両派によるテニユア人事の潰し合いの犠牲となったシカゴ出身の若手（フート、ダンカン、ストラウス）であった。そして、この時代に育ったシカゴ出身者の多く（たとえば、ハワード・S・ベッカーやゴッフマン）が、他大学に分散していった。これが、「第二次シカゴ学派」のディアスポラ物語である。

この転換期の初期に、興味深い出来事が起こっていた。1951年から52年にかけての社会学科の自己評価研究である。これはフォード財団が提供した、今でいうファカルティ・デベロップメント（FD）のための助成金である。シカゴでは、この資金を、学科再建のための議論につかった。それは、社会学の主要な研究領域のシラバスを作成するためのセミナーという形をとった。しかし、アボットの分析によれば、このセミナーは、だれがパークの真の後継者かをめぐり、ワースとブルーマーとヒューズのあいだの争いを誘発した。かれらは3人とも、ハーバードのパーソンズ流構造機能主義や、コロンビアのラザースフェルド流計量分析を、社会学とは認めていなかった。したがって、社会学とは何かをめぐり争いは、われわれの眼から見れば、シカゴ社会学とは何かをめぐり争いとなる。そして、アボットは、その議論の過程そのものに、文化的実体としての「シカゴ学派」の創造を見いだすのである。

やや立ち入って整理してみよう。アボットによれば、ワースは、パーソンズを意識しつつ、シカゴ社会学の特徴を、抽象化するな、現実の人のびとと問題を見失うな、といった一連の格率としてしか表現できなかった。しかしそれはたしかに、パークの研究実践の基本姿勢を抽象的に表現したものであった。ブルーマーもまた、別の形で抽象の党派を代表していた。ブルーマーは、計量的な態度測定の発展を牽制しながら、社会心理学を包括的なアプローチとして論理的に呈示しようとし、返す刀で、ヒューズの質的研究実践には論理的な難点があり、十分に解釈的であることが保証されていないと主張する。アボットは、ブルーマーの議論が、客観主義、量的方法、変数を基礎とするアプローチをひとまとめにして、主観主義、質的方法、文脈主義的アプローチと対立させている点で、破壊的であると指摘している。アボットが紹介する、フートとブルーマーの論争も印象深い。フートは、ブルーマーの主張は、結局のところ、あるひとつのパラダイムへのコミットメントにすぎないと喝破してしまう。ブルーマーの理論的努力は、シカゴ学派の背後仮説を明示化することによって、シカゴ学派のもつ〈存在へのコミットメント〉を露わにするが、そのためにかえって、このような相対主義的な反応を誘発してしまうのである。

じっさいにフィールドワークをやっているヒューズにとってみれば、このような議論には関心がなく、ワースの格率やブルーマーの定理にしたがった実践があるのみである。人類学との関係が問われると、ヒューズは人類学と社会学の分化を反証する証拠を丁寧に挙げていった。ヒューズが意地を見せたのは、討論の翌日に配られたシカゴ学派の歴史のパロディーである。「風刺に隠されているのは、ヒューズ自身がロバート・パークの真の後継者であるという大胆な主張である」とアボットは読み解く。

結局、このセミナーは、ワースの死を挟み、合意を見ずに終わった。この年（1952年）、バージェスは退職し、ブルーマーもバークレイに異動した。そして、ヒューズが学科長となり、学科のコロンビア化が始まることになる。それにもかかわらず、若手の前で展開されたシカゴ学派第二世代の争論は、次世代にシカゴ学派とは何か——現実に立ち向かう強烈な主観性という〈存在へのコミットメント〉——を伝達可能にした。そして膨大な議事録そのものは、40年後にアボットとガジアーノによって明るみに出されたのである。

**アルビオン・スモールとシカゴ大学** 騒々しいエピソードの多い本書のなかで、比較的穏やかに時間が流れているのが第3章「アルビオン・スモールの *AJS*」である。時代は半世紀もさかのぼり、草創期の *AJS* が主題となっている。資料的制約から、統計的データが多いが、要点ははっきりしている。第一に、初期の *AJS* はアルビオン・スモールが個人的に編集する雑誌であったこと、第二に、社会学が学問分野として確立しておらず、改革運動や社会事業と未分化であったこと、第三に、それにもかかわらず、*AJS* は、1905年創立のアメリカ社会学会とともに、社会学を大学における学問分野として確立していく運動の中核的集団をひきつけていたこと、そして第四に、*AJS* の版元であるシカゴ大学出版会は、社会学会を *AJS* の専属市場として位置づけており、この市場戦略が学問分野の確立を促進したこと、以上である。

ここでも、いくらか背景的な説明を補足しておこう。シカゴ大学は、1892年、石油王ジョン・D・ロックフェラーの基金によって開設された。ロックフェラーは、初代総長となるウィリアム・レイニー・ハーパーに開設準備を依頼、ハーパーは、当時としては革新的な制度を備えた研究志向の大学として、シカゴ大学の制度設計をした。大学院中心の大

学制度、大学出版会、公開講座の設置などである。バプティスト教会とのつながりも強く、シカゴ大学の前身はバプティストの神学校であり、ロックフェラーもハーパーもバプティスト、シカゴ大学ではバプティスト教会の基金も受け入れていた (Bulmer, 1989)。

都市の文脈も重要である。19 世紀後半のシカゴは、ミシガン湖畔の田舎町から急速に大都市に成長し、巨大な富を蓄積する一方で、貧困問題、労働問題、移民問題などの都市問題が集積していた。1893 年に開催された万国博覧会、コロンビア博は、新大陸発見 400 周年を祝うとともに、シカゴの成長を象徴するイベントでもあった。しかし、同時に始まった不況のために、街には失業者があふれ、シカゴ万博を訪れた人びとに、現実の都市の惨状を見せつける結果となった。大都市では、労働運動が成長する一方で、プロテスタントによる社会改革運動も盛んであった。セツルメント・ハウスを中心とする社会事業や、貧困の実態を明らかにする社会調査運動は、教会と結びつきながら、アメリカの社会学の母胎となっていた。

シカゴ大学社会学科の初代学科長、アルビオン・スモールも、バプティストで、社会改革論者のひとりであった。かれは、コルビー大学の学長をしていた。「社会学」に深い関心を抱いていたスモールは、ハーパーからシカゴ大学への誘いを受けたとき、社会学を教えることを希望したという。結局、ハーパーは、シカゴ大学に社会学科を設置し、スモールを学科長として迎えるとともに、同じバプティストの牧師で社会事業の専門家であるチャールズ・ヘンダーソンを教授として、またチャプレンとして、採用した。こうして、世界で初めて社会学の学位を出す社会学科が誕生したのである (Bulmer 1989)。

本書では、スモールがハーパーから *AJS* の創刊について相談を持ちかけられる場面が描写されている。スモールが、*AJS* の創刊を「天命」と考えたこと、シカゴ大学出版会が、*AJS* を宗教雑誌と捉えていたことなどは、こうした文脈のなかで理解可能となる。しかし、スモールの住んでいた世界がいかに宗教的雰囲気にも包まれていたとしても、スモール自身は、社会学を学問として自立化させる方向に意識的に向かっていた。スモールの授業は退屈であったという伝説は、有名であるが、かれはかれなりに、学問としての社会学の要件を模索していたに違いない。

**シカゴ学派の *AJS*** 第 4 章「シカゴ学派の *AJS*」は、スモールが引退したあと、*AJS* が、フェアリス、バージェス、オグバーン、ワース、ブルーマー、ヒューズなどのシカゴ学派の大立て者たちによって担われるようになった時期を扱っている。奇妙なことに、ここにはパークがまったく登場しない。1920 年代のシカゴ社会学最盛期は、*AJS* にとっては無関係であったかのようなのである。社会学は、こんにちのわれわれが理解できるような姿をとりはじめ、*AJS* は事実上の学会誌として、号を重ねていった。

しかし、第 4 章のハイライトは、1930 年代の ASA 反乱である。この話は、不必要なほど詳細に書かれていて、ややこしいが、結局のところ、学会がシカゴ支配から制度的に自立するところまで成長したことを意味している。それはまた、ハーバードとコロンビアの台頭によるシカゴ一極支配の崩壊の始まりであった。だが、じっさいの経緯はひどく複雑だ。反乱分子のひとり、シカゴ出身の L・L・バーナード。かれは、フェアリスがシカゴ大学に着任したことを快く思っていない。どこにでもありそうな話である。1933 年 12 月、アメリカ社会学会出版委員会は、*AJS* の選択制を報告、明けて 1934 年 1 月、シカゴ大学出版会常務取締役ドナルド・ビーンがアメリカ社会学会会長のバージェスに、1935

年から出版会と学会との間の出版契約を解除する旨を通告。バージェスはこのことをだれにも知らせず、1935年12月、アメリカ社会学会出版委員会は、『年報』に関するシカゴ大学出版会との契約解除を決定。学会の書記であったブルーマーは、出版会側から契約が解除されていることを知らずに、出版会にこの決定を伝えている。にわかには信じがたい話である。1936年、学会は『年報』を引き継ぐかたちで『アメリカ社会学評論』(ASR)を創刊、学会発表の掲載優先権を設定する。

こうしてAJSは、学会誌としてのくびきから解放され、「シカゴ学派」の雑誌となった。編集は、バージェスとその同僚たちによってインフォーマルにこなされた。査読は仲間内の信頼関係によってなされていた。ASRとの差別化を狙った特集は、商業的にも成功した。1940年代からは、ヘレン・ヒューズが編集実務を仕切るようになった。1950年代に、この仲間集団が解体するまで、AJSはバージェス一座が編集する高品質の雑誌でありつづけた。

**移行期のAJS** 第5章が扱っているのは、1950年代後半から1970年代までのAJSである。アボットは、この時期を、AJSが第一次集団の雑誌から、専門職の雑誌として標準化されていく移行期として特徴づけている。ここにもまた、ドタバタ騒ぎが、ふたつもあり、歴史はジグザグしながら進んでいく。時代は下って、第2章で扱った転換期をくぐり抜け、ハウザーが学科長として社会学科を再建し、エヴェレット・ヒューズがAJSの編集長を務めていた1950年代後半から始まる。最初の騒ぎは、ヒューズからロッシ、ブラウ世代への編集権の移行であり、とくに注目されるのは、双方匿名査読制度の導入をめぐる論争である。第二の騒ぎは、1960年代から70年代の初頭にかけて、アーノルド・アンダーソンとフローレンス・レヴィンソンによる編集の時代である（この時期、何か学科内での対立があったようだが、それは書かれていない。そしてもちろん大学紛争があった）。

第一の騒ぎは比較的単純である。第2章で扱った学科内対立の火がまだくすぶっていた1957年、前年に学科長を降りたヒューズが休暇を取ってドイツに行くことになった。このとき、AJSの編集長を務めていたヒューズは、ロッシに代役を任せた。ロッシは、エヴェレットの不在中に、AJSの編集体制の改革を提案、ヘレン・ヒューズを中心にインフォーマルに回っていた編集過程をフォーマルに標準化し、双方匿名査読制度を導入しようというのである。この提案は、温厚なヒューズの怒りを買う。ロッシは矛を収めようとするが、今度は学科長のハウザーが介入して、編集権移行の筋道をつけてしまう。これは、学科長人事をめぐる量派と質派の対立の続きとも読めるし、編集権をめぐる世代間闘争とも読める。しかし、アボットのまなざしは、双方匿名査読制をめぐる論争に凝縮されている「文脈主義パラダイム」（ここでは旧世代のヒューズが代表している）と「変数パラダイム」（ここでは新世代のロッシに代表される）の対立に向けられていく。

ここで、文脈主義パラダイムとは、社会的事象は、時間と空間によって状況づけられており、時間的・空間的文脈のなかで捉えないかぎり、理解できないという見方である。やがて第7章で論じられるように、アボットは、この見方こそ、今日的な意義をもつシカゴ社会学の見方であると考えている。他方、変数パラダイムとは、社会的事象を、変数として脱文脈的に捉え、変数間の関係を明らかにすることが、科学としての社会学の課題であるとする見方である。構造機能主義は、測定可能な変数間の関係を導き出すことのできる理論を社会学理論の理想としていたし、計量社会学は、まさに測定された変数間の関係を

分析する手法として台頭していた。構造機能主義と計量社会学は、けっして真に架橋されなかったとはいえ、知的に手を携えていた。アボットはそれを変数パラダイムと呼んだのである。

さて、双方匿名査読とは、投稿者から編集者に送られてきた原稿の審査を、編集者が投稿者の名前を隠して（通常は複数の）査読者に依頼し、査読者は審査結果を編集者に（通常はコメントを付けて）報告、編集者はその審査結果を、審査者の名前を明かさずに、投稿者に伝えるというもので、こんにち、社会学に限らずあらゆる分野の学会誌などで一般的に採用されている方式である。この方式は、ヘレン・ヒューズの役割を形式的なものにとどめることになる。そうした理由もあったであろうが、エヴェレット・ヒューズは、投稿者の名前が分かっていることによる偏見よりも、査読者が投稿者を推測することのほうが有害であり、どのみちそれ以外の偏見は避けられないと主張し、査読者が自分自身の編集方針をめいめい勝手に雑誌に持ち込んでしまうことを恐れた。最終的に、（ロッシではなく）ブラウが 1961 年に査読制を導入することになるのだが、その際に、ヒューズはさらに踏み込んだ批判を付け加える。投稿された論文は単体では評価できず、投稿者の研究過程という文脈のなかで評価されるべきであるというのだ。ロッシやブラウが、双方査読制度を導入しようとした根拠は、明確には述べられていない。しかし、アボットは、それを科学主義イデオロギーであると推測する。変数パラダイムにしたがえば、個々の論文は、科学の規範に則って客観的に判定可能である。個々の論文は、先行研究との関連において、一定のルールの下で、科学への貢献を競っているだけであり、だれが書いたかは評価に影響を与えないはずなのだ。ロッシやブラウの世代は、そのような科学主義のイデオロギーを共有していた、とアボットは考えるのである。したがって、査読制の導入は、変数パラダイムが支配的になったことを暗示している。

移行期の後半の騒ぎは、もっと複雑である。あらゆる条件が、編集過程を混乱に陥れた。若くて力量不足の——少なくともアボットの記述からはそうとれる——編集者アーノルド・アンダーソンの起用、ラジカルでやり手の編集事務長レヴィンソンの突出、投稿数の急増と、それにとまなう査読者不足と「民主化」、その結果としての不慣れな査読者の増大、査読の作法の未確立による投稿者と査読者双方の不満の爆発、編集事務の混乱、そして、学生反乱によって加速された科学主義イデオロギーの崩壊。おそらく学科のガバナンスの低下もあったに違いない。レヴィンソンの大胆な企画によって、この時期の *AJS* が面白くて、よく売れる雑誌になったことは、最大の皮肉である。

**現代の *AJS*** 第 6 章は、ビッドウェルとラウマンによって、こうした混乱が收拾され、編集過程が構造化されていく時期を扱っている。ここで出現した構造は、現代の学術雑誌に共通する構造である。ビッドウェルは、投稿料の設定によって投稿数を抑制し、門前払いをせずにすべての投稿論文を査読に回す「普遍的査読」を実現した。ラウマンは、査読者の質を維持するために、査読者を評価するシステムを開発した。こうして、ビッドウェル以降、審査過程は適正手続きに従うべきであり、投稿された論文を却下するには正当な理由が必要で、投稿者は査読者の書き直し要求に応じる義務があるとする道徳的構造が形成されてきた。簡単に言うと、論文審査の構造は、まるで役所の補助金審査か、裁判所の審理のようなものとなった。

もちろん、ここには多くの問題が残っていた。優れてはいるが面白くない論文は採択さ

れるべきなのか（査読制度によって、掲載される論文はつまらなくなったのではないか）。問題を提起する論文よりも、問題を解決する論文のほうが採択されやすいのではないか（パラダイム革新を抑制する傾向があるのではないか）。査読者は、論文を適切に評価する能力をほんとうに持ち合わせているのか（査読者に当たり外れがあるのではないか）。一流の研究者は、レベルの低い査読を嫌って、雑誌から逃げ出しているのではないか。新たな分野を切り開こうとする革新者は、たいていは、自分たちの自身の雑誌を創刊するか、書籍として出版することによって、革新を達成しているのではないか。いずれも思い当たるフシのある疑念である。

こうした疑念が払拭できないにもかかわらず、学術雑誌が存続しているのは、学術雑誌に論文が掲載されることが、大学での昇進（テニユア決定）の基準になっているからだとアボットは指摘する。「学部長とその委員会が候補者の業績を読む能力がないか、読む気がなく、自分たち自身の〔学部の〕学科の判断を信頼しておらず、業績一覧の論文数を数える以上のことはしたくないと思っていることは、痛いほど明らかである」。学術雑誌は、いわば、専門職の入試センター試験のようなものである。大学は自分たちで試験をせずに、センター試験の点数に頼っている。だれも受験生の答案を読もうとはしない。センター試験がなければ、受験生も困るが、大学も困る。

学会の機関誌ではない *AJS* といえども、適正手続きによって武装しなければ、投稿者と大学の要求に答えられない。*ASR* との差別化が図られているとはいえ、*AJS* もまたより大きな専門職の構造の不可欠の一部として組み込まれるに至ったというのが、アボットの言わんとするところである。これが *AJS* と、一般に学術雑誌の現状である。

結局、*AJS* 百年の歴史はなんであったのだろうか。「アルビオン・スモールの *AJS*」は、学問分野としての社会学を生み出した。ひとたび、学会が確立されると、シカゴ支配は終わりを告げ、*AJS* は「シカゴ学派の *AJS*」となった。しかし、「変数パラダイム」の台頭によって「シカゴ学派」自体が困難に直面すると、社会学科の世代交代の過程で、*AJS* は新世代の手に奪取された。ブラウの *AJS* は、科学主義イデオロギーを頼りに査読制度を導入したが、編集者の権威が維持されていた点では、シカゴ学派の *AJS* の母斑を残していた。1960年代には、編集過程はほとんど破綻に近い状態に陥った。しかし、その混乱のゆえに、レヴィンソンの手腕によって雑誌の輝きは増した。1970年代に入ると、混乱は收拾され、*AJS* は、専門職の構造にしっかりと組み込まれるようになった。各時代の *AJS* は、実質的にはべつものであり、それらをつなぐものは *AJS* というタイトルの連続性だけであると、アボットは主張する。*AJS* は、街を練り歩く御輿のようなものであり、担ぎ手はつぎつぎと変わり、長期的には *AJS* をとりまく担ぎ手の構造、すなわち社会学科と社会学の配置も変化していったのである。この喜劇に満ちた悲劇に何か救いがあるとするれば、今後も不意に *AJS* をとりまく社会学科と社会学の配置に変化が起こるかもしれないということである。変化のカギを握っているのは、いまや、学問分野としての社会学の動向である。

**文脈主義の再生** この混乱に満ちた話は、第7章「シカゴ学派の継続的意義」で大団円を迎える。この章でアボットは、「社会学が白けている」のは、変数パラダイムが飽和状態に陥ったからであると主張する。変数パラダイムに代わるものが、文脈主義パラダイムである。シカゴ学派の今日的な意義は、それが文脈主義的パラダイムの古典として解釈でき

るところにある。たしかに、かつてのシカゴ学派は、文脈主義的パラダイムに相応しい方法論を持ち合わせていなかった。しかし、こんにちでは、社会的空間についてはネットワーク分析、社会的時間についてはシーケンス分析のような方法が開発されている。もちろん、両者を総合するような方法に至るには、このさき長い道のりがあり、新しい発想が必要である。だが、出来事を時間的・空間的に位置づける手法が発展するにつれて、社会学は、これまでとはまったく違った思考様式に沿った発展を遂げるだろう。アボットの主張には、大言壮語の感がぬぐえないものの、興奮に満ちた語り口にはつつい引きこまれる。これまで、社会学を「白けている」か「興奮している」かを基準に評価した論者がいたのだろうか。

アボットの話のなかで、ふたつの事例がとりわけ私の注意をひいた。ひとつは、ダンカンの研究歴である。ダンカンといえば、ブラウとの共著『アメリカの職業構造』の著者として日本でもよく知られている。この書は、変数パラダイムの典型例とも言える地位達成研究の出発点をなす社会階層研究の古典である。私は、大学院学生時代に富永ゼミでこの本を読んだおぼえがある。そのダンカンが、じつは、ブルーマーの試験ですべて優を取ったシカゴ学派の最も優れた理解者であり、晩年に『社会的測定に関する覚書』で、測定問題に痛烈な批判を浴びせていたことを、本書で初めて知った。もうひとつは、ゾーボーの『ゴールド・コーストとスラム』である。アボットは、この書を、時間と空間の文脈性が最も高い「相互作用場」を分析しているシカゴの古典として読み直している。アボットは、学生時代にこの本を読んで、目的の分からない歴史にすぎないと感じたと述べている。第一印象は良くなかったというわけだ。私もまた、『ゴールドコーストとスラム』は、一冊でシカゴ学派の基本概念がすべて分かる便利な本ではあるが、マウラーやキャバンやショウとマッケイが集めたデータやドキュメントを切り取ってきて、パークやバージェスやトマスの概念をつかって分析しただけの、オリジナリティのない研究であると思っていた。アボットが論じるような読み方が可能かどうか、もう一度検討してみたい。

**結び** このように、本書は、シカゴ社会学の歴史を扱ったものとはいえ、時系列的にエピソードが展開する歴史書ではない。第1章は、本来ならば、シカゴ社会学の歴史の先行研究を扱う位置にあるが、その位置づけを踏み越えてしまっている。第2章で、いきなり、なじみの薄い1950年代を扱っているのは、この時期に文化的実体としてのシカゴ学派が創造されたからである。シカゴ学派が構築されて初めて、アルビオン・スモールの *AJS* にさかのぼることが可能になる。*AJS* のその後の歴史は、時系列に流れるようになる。しかし、シカゴ社会学の最盛期と、先に論じた1950年代初頭のエピソードが、どこに挟まるのかを注意して読まなければならない。そして最後は、本書そのものの分析視点にもなっている文脈主義パラダイムが、社会学の未来として熱っぽく語られる。そのような意味で、本書は、アボット流の「シカゴ社会学のシカゴ社会学」であると言ってよいだろう。

各章で紹介されるエピソードは、従来のシカゴ社会学の歴史研究では扱われてこなかったものであり、一見すると筒井康隆の『文学部唯野教授』を彷彿させるような荒唐無稽さがあるが、それでいて十分な裏付けがある。そしてエピソードの荒唐無稽さが、本書を抜群に面白くしている。この面白さをタイトルに表現したくて、あえて「シカゴ社会学百年の真相」というセンセーショナルなサブタイトルをつけた。社会学史上、神話化されている教授陣は、じつは「自分たちと同じような集団で、どこにでもある奇妙な同盟をとるな

った、よくある学問的争いをしているのだ」。

私は、本書を、すべての職業的社会学者と大学院学生に勧めたい。社会学者が本書の要点をつかめば、自分たちが学科会議で何をしているのか、学会誌のレフェリーを依頼されて煩わされるのはなぜなのかが、少しは分かってくるだろう。大学院学生が本書から学べば、査読雑誌に投稿して却下されるという体験や、学会事務局の手伝いを押しつけられるという体験が、何を意味しているのかを、少しは理解できるにちがいない。しかし、学部学生には読ませたくない。かれらがこの本を読んだら、大学院に進学する意欲をなくすにきまっている。

## あとがきと謝辞

原書の成立経緯が「ホラー話」であるように、この訳書の成立経緯も「ホラー話」であった。もともとは、ガンズの『都市の村人たち』の翻訳を思い立ち、ハーベスト社の小林社長にその話を持ち込んだことが発端となっている。この話が小林社長から奥田道大先生に伝わり、「ネオ・シカゴシリーズ」を出版しようということになった。これを受けて、私が、アボットの言う第三次シカゴ学派の都市コミュニティ研究をいくつか挙げたところ、奥田先生から、ぜひアボットの本書を加えてほしいとのリクエストがあった。見たところ一番厄介そうであったが、引き受けざるを得ない。当時、私は東京都立大学大学院都市科学研究科に勤務しており、たまたま修士課程を修了して、シカゴ大学社会学科の大学院に進学した中国からの留学生がいた。<sup>レン・シュエフエイ</sup>任 雪 飛 (Ren Xuefei) である。そこで、彼女に頼んで共訳とすることにした。彼女がアボットの近くにいるというだけで、困ったときには何とかなると思ったのである。雪 飛<sup>シュエフエイ</sup>は、脱兎のごとく訳文を仕上げ、私のところに送ってきた。私は、すぐにこの訳文を読んで手を入れることはしなかった。自分で全訳し、そのあとで対照させて、食い違いを検出し、誤訳を避けようと考えたのである。彼女が2年で仕上げたものを、私は5年かかった。その間、彼女の CV には、forthcoming として掲載されつづけ、ときどき「いつまで近刊なの？」と催促される始末である。翻訳作業そのものはとても面白く、楽しかったが、結局、私の訳文が仕上がったのは 2010 年の夏であった。その間に、雪飛はシカゴ大学で学位をとり、ミシガン州立大学の任期制の職を得、英語で自著を出版してしまった。彼女は日本語を「忘れて」しまい、この解説の冒頭にあるアボットの紹介は、彼女が英語で書いたものをもとに、私が日本語で書き直すはめになった。

アボット教授には、この間、2回、電子メールで疑問点を問い合わせた。1回目は、雪飛をとおして、2回目は、直接に。「疑問点がこれだけなら、私はラッキーマンだ」とジョークを飛ばしながら、迅速かつ丁寧にお答えいただいた。最後に、日本語版への序文を依頼したところ、快諾され、すぐに執筆していただいた。依頼してからわずか4日の早業である。記して感謝の意を表したい。共訳者とはいえ、任雪飛にも感謝したい。彼女のリードがなければ、本書の出版はおぼつかなかった。そして、もちろん、本書の翻訳のきっかけを与えてくださった奥田道大先生には感謝の念でいっぱいである。つねに最先端を見極める先生の選書眼には恐れ入る。最後に、東日本大震災の余震に酔いながら、ややこしい原稿を組んでいただいたハーベスト社の小林達也社長に、いつもながら感謝の意を表し

ます。

2011年5月1日  
松本康